署長室から 名北の空の下

名古屋北労働基準監督署長　浅井文彦（あさいふみひこ）

62

近年、線状降水帯の発生などにより、短時間に猛烈な雨が降り、道路の冠水や河川の増水、鉄道・バスなどの公共交通機関が運休する事態が各地でみられます。こうした豪雨は、私たちの日常生活だけでなく、企業活動や働く方々の通勤・帰宅にも大きな影響を及ぼします。

特に注意したいのが、「早く帰宅させれば安全」という判断が、必ずしも適切とは限らないということです。大雨の最中に一斉に労働者を帰宅させれば、駅で長時間足止めされたり、運転を見合わせた交通機関の再開を待つことになったりする場合があります。また、徒歩で帰宅しようとして、冠水した道路や増水した河川、アンダーパスなど危険な場所に近づくおそれもあります。自家用車での移動についても、道路状況によっては危険を伴います。

豪雨対策
（無事に帰宅できましたか？）

さて、今年9月に発生した名古屋市を中心とした集中豪雨の際、みなさんは無事に帰宅できましたか？　私は、幸いにもその日のうちに帰宅することができましたが、帰宅手段に潜むリスクについて、見誤っていた部分があり、反省の意味も含め振り返ってみます。

通勤に地下鉄を利用していますが、多くの職員が退庁する午後5時頃には、地下鉄や市バスは運転を見合わせていました。その後、市バスは終日運転取りやめ、地下鉄は運転再開に向けた復旧活動を続けていました。また、名鉄バスは大幅な遅れはあるものの運転を続けているとの情報を得ていました。

地下鉄が運転を再開しなくても、名鉄バス（基幹2号系統）が運行していれば、自宅近くのバス停までたどり着けると安心していました。しかし、いつまで待っても地下鉄の運転は再開されません。午後9時30分頃、名鉄バスを利用して帰宅することを決意し、最寄りのバス停でバスの到着を待っていました。およそ50分間に3本のバスが到着しましたが、いずれも満員で乗車できませんでした。監督署に戻ることを考え始めたところ、地下鉄が運転再開の準備中であるとの情報を得たため、地下鉄名古屋城駅に向かいました。ちょうど、運転再開の最初の列車に乗車することができ、帰宅の途につくことができました。



今回、地下鉄が止まった場合の帰宅の手段として「名鉄バスの利用が可能」という、代替手段の確保においては問題なかったと思いますが、「満員で乗車できない」事態を想定していなかったことについては、大いに反省すべき点です。なお、結果論ですが、満員のバスではなく、ゆとりのある地下鉄に乗車できたことは幸運だったかもしれません。

労働者の居住地や通勤方法はさまざまです。鉄道利用者、自家用車通勤者、徒歩・自転車通勤者では、豪雨時に直面する危険も異なります。全員一律の判断ではなく、それぞれの帰宅経路や交通事情を踏まえた柔軟な対応が求められます。

また、豪雨はいつ、どこで発生するか分かりません。いざというときに適切な判断ができるよう、今一度、職場の緊急時対応や連絡体制、帰宅困難となった場合の対応について点検していただき、「労働者を危険な状況に置かない」ことを第一にした職場づくりをお願いいたします。

イラスト・木村武司